

看護提供方式見直しへの取組み

施設名：公立大学法人横浜立大学附属病院 氏名：三浦百合子

【概要】

「看護提供方式とは、組織の理念や方針に沿い、質の高い看護サービスの提供と看護職員の効率的活用を意図し、(略)採用している看護業務分担方式である¹⁾」とされる。当院では継続受け持ち看護サポート方式を運用しているが、看護業務を取り巻く状況の変化に対応しきれていない現状がある。

そこで、前述の視点で改めて看護提供方式の見直しに取組んだ。発足したプロジェクトでは、まず現状の可視化が重要と考え、意見を出し合い、「方式上の役割」「教育」「連携」等のカテゴリーに集約された。受け持ち役割では、ケアが継続される、看護師が成長するという反面、状況変化に対応できていないという意見も多くあがった。提供方式の評価に関する検討の中で、私たちが提供したいと考える看護は、看護部全体で共通理解されているかの確認が必要となり、看護管理者全員で意見交換の場を設けた。内容のキーワードには、「標準的、個別性、専門性のある看護」「高い安全性、倫理性」「根拠に基づいた実践」「退院後を捉えた看護過程展開」「意思決定を支える」「よいチームワーク」等があり、方向性は一致していた。今後は、この内容を整理・可視化し、検討をすすめる。

【背景】

当院では平成 18 年より、継続受け持ち看護サポート方式という独自の看護提供方式を運用している。これは、入院～退院までの看護計画に責任を持つ受け持ち看護師と固定チームによるサポート、加えて指示受けに関して一部機能別を取り入れている。指示を一括してリーダーが受けることにより、業務効率向上とともに、新人看護師の業務負担を軽減し育成にあてることを利点のひとつにしている。

看護業務を取り巻く当院の現状をみると、約 10 年で平均在院日数は 17.8 日から 14.9 日へ短縮し、70 歳以上の患者割合は 28.2%から 37.1%に上昇した。患者側では、疾病の複合・慢性化、高齢化、独居等の問題により他職種・地域との連携は欠かせない状況が増えている。看護側では、一般病棟での重症化や認知症・せん妄患者への対応増、実施や説明に伴う役割責任の遂行、看護実践能力育成に要する投入資源増、超過勤務や休暇取得等のワークライフバランスの課題等がある。慢性化した病状とともに生活することを支援できる看護が、これまで以上に必要とされているが、対応しきれていない現状がある。看護師の実践能力・経験のバラツキや不足といった要素もあるが、チームとしてのサポート機能や動きはどうなのかといった疑問も感じた。

そこで私は業務担当として、限られた資源（人的、物理的、情報、時間等）を活用して、質のよい看護を効率的に提供する仕組みであるかという視点で改めて看護提供方式を見直し、検討することを課題とした。

【実践計画】

- 1) 検討の視点や方向性、具体的方略を思考・提案するため、看護管理者数名でプロジェクトを発足させる。文献活用、ディスカッション等を通して視点・課題を共有する。以下、実践計画はプロジェクト主体で行う。
- 2) 部内会議（看護師長会、副看護師長会等）で活動報告を行うとともに、意見交換の機会を設け、部内共有・検討の機会をつくる。
- 3) 現状評価の視点・方法を検討し調査する。調査結果から成果と課題を明らかにする。

- 4) 今後の方向性を鑑みて、提供方式に関する提案を行い、モデル病棟の協力を得て試行する。
- 5) 試行結果から評価・修正し、段階的に導入できるよう計画・実施する。

【結果】

現在の進捗状況は、実践計画2)の段階であるため、それまでの経緯を報告する。

実践計画1)では、看護管理者を中心としたプロジェクトを10月に発足させた。検討の方向性として、看護提供方式に係る①看護ケアの実態(安全性、効率性、基準・手順でみる水準等)、②各役割の発揮状況と教育、③勤務体制、労務管理、④患者評価等と考え、それに合わせてメンバーを選出した。副看護部長(業務担当、人事・総務)2名、看護師長5名、看護師1名で、現方式導入時の資料や過去5年間の検索から得た文献も参考に検討を開始した。話し合いの中で日常を捉える目線の近さや相違がみられ、まずは現在の状況を可視化することが重要と考え、視点を固定せず看護提供方式をテーマに各自の視点で自由に付箋に書き出すこととした。その結果、最も意見が多かったのは、受け持ち役割、リーダー役割であった。意見をカテゴリー化すると、方式上の役割に関すること、教育に関すること、連携に関すること、退院支援や記録といった現象等々であった。受け持ち役割を通じて、ケアが継続される、看護師も成長するという反面、看護を取り巻く状況の変化に対応できていないという意見も多くあがった。

この結果をもとにプロジェクト内で議論をすすめる過程で、看護の効果(アウトカム)は何か、そもそも受け持ち看護師の役割範囲は共通認識されているかといった疑問に至った。提供方式の評価にあたっては、現状の在り様を明らかにすること、及び提供したいと考える看護を現していけるかという捉え方の両方が必要と考えていたため、後者に対する看護部全体の認識が共通理解されているか確認することが必要となった。

そこで、実践計画2)にすすみ、これまでの検討経緯を看護師長会で報告し、1週間後に看護管理者全員で意見交換の場を設けた。看護管理経験別に1グループ4名前後とし、ファシリテーターとしてプロジェクトメンバーが1名ずつ入った。限られた時間で効果的に話し合うために、①私たちはどのような看護を提供したいのか。看護で大切にしているものは何か、②現状はどうか。出来ていることと弱いと感じること、③そのために何ができるか(個人、体制、方法等)、段階的に具体化できるようテーマを設定して行った。各グループから多くだされた内容(キーワード)には、「標準的、個別性、専門性のある看護」「高い安全性、倫理性」「根拠に基づいた実践」「退院後を捉えた看護過程展開」「意思決定を支える」「よいチームワーク」等があり、概観すると目指す方向は一致している。望む姿は表現されているが、現状を示す具体が少ない傾向にあり、できていることより弱いと感じることが多かった。また、テーマ①では言葉の抽象度にバラツキがあった。望む姿から繋がる具体(①→②)は、提供方式を評価する視点になると思われるため、抽象度の度合いを分けて整理し、内容分析できるよう①→①'→①''→②→③→その他を横軸に、カテゴリーごとの意見を縦軸にフレームをつくり、全てのグループの意見をフレームで整理し、可視化できるよう取り組んでいる。

【評価及び今後の課題】

看護提供方式の見直しを課題として取り組み、これまでのプロセスでは、目指す看護とその具体について改めて検討・確認することができた。今後は、看護管理者間の検討結果をフレームで整理・可視化し、内容の幅と深さを確認したい。それを基に、副看護師長等のスタッフを交えて検討を拡大し、実践計画3)以降を継続する。